

# 学校図書館を利用した 「チーム・ティーチング」を探る

—T.T.は生徒の学習意欲を変えられるか—

An Investigation of “Team Teaching” Using a School Library

—Is a Student’s will to learn Changed with T.T.—

村上 詠子

(Eiko MURAKAMI)

**キーワード**：学校図書館 チーム・ティーチング メディア活用能力 学習指導  
人間形成力

**KeyWord**：School library Team teaching Ability for media utilization  
Learning instruction Human being formation

## I. はじめに

司書教諭には、全校の教育活動に学校図書館の活用を組み入れた教育活動の展開、教科や学習と連携する図書館活動、メディア活用能力育成の指導、読書活動や読書推進・読書関連活動の推進・児童生徒の読書指導、情報教育などの教育指導の役割がある。学校図書館に配属される司書は、学校司書とよばれることもあるが、この学校司書という職名は法的には制定されていない。司書の職名・資格・待遇は全国の学校機関によって様々な名称が与えられる。司書は都道府県や市町村の公共図書館等で図書館資料の選択、発注及び受け入れから、分類、目録作成、貸出業務、読書案内などを行う専門的職員であるが、学校図書館での主な業務はメディアの組織化、メディアの提供・管理、児童生徒・教職員に対するサービスを担当する。学校図書館は指導機関であるため、生徒の対応は司書教諭や係教諭が担当し、学校に所属する司書はメディアやサービスに関する専門的な立場で業務を遂行する。ここに司書教諭と司書の大きな違いがある。

司書教諭は学校図書館の経営（運営）をしながら、生徒の学習指導、人間形成としての読書指導、メディアの構成（コレクションの構築）、情報メディアの活用の指導を行う。司書教諭は学習指導において、生徒自身が課題解決に必要な知識や情報を的確に入手し、分析し、理解する基礎的な知識・技能・態度を育成し、情報活用能力の修得ができるようにすることである。

---

むらかみえいこ：目白研心中学校・高等学校教諭

る。急激な社会変動、メディアの多様化・氾濫の中では、生徒たちに絶対的価値観を意識付けるのは難しい。これからの学校教育は、生徒が主体的に学びとる自己主導型学習に結びつく指導を行う必要がある。それに伴い、教科学習指導では指導不可能な部分を学校図書館では指導可能である部分として、生徒が自ら問題を発見し、多種多様な選択肢を比較し、批判と討論を繰り返せる態度を育成することが学校図書館を利用した学習指導に期待されている。

学校図書館は、教科学習に応じた資料の提供から生徒の自主学習へ導く指導に当たる必要があるが、現在の生徒たちは資料の利用法に希薄であり、メディアの活用能力の伸長に欠けていることに危機感を抱き、今回、生徒の個を生かす学習指導、生徒の個人差を克服させる学習指導としてチーム・ティーチング（以下、T.T.とする）の導入を3つの教科を対象に、T.T.の導入によって生徒の学習意欲の向上と資料の収集から利用法を克服させメディア活用能力の育成を図り、T.T.の効果と問題点を考察する。

## Ⅱ. 生徒の学習意欲を変えられるか

### 1. 教育理念に基づく学校図書館の関わり

福祉国家の基本政策の一つに学校教育があげられる現代社会において、社会システムそのものが教育と人間形成を学校教育に依存する形に変わってきている。必然的に、教育構成要素や現代の教育コミュニケーションの特質に変容は生じる。社会システムを構成する教育の変容は、教育機関である学校図書館の果たす役割と課題をも含んでいる。情報に溢れた現代社会を生きるためには、学校教育を終えた後でも生涯にわたり人格を高め、より良い人生を生きることが人として望ましい。そのためには生涯において学問をすることが重要となる。子どもたちがこの社会で自主的に生きるためには、子どもたち自身がその条件を知的に探り当てる能力を育てる必要がある。それが、主体的に自ら学び、自分で問題を解決できる能力である。子どもたちは、学校教育を通して、自己教育のために必要なものの考え方や見方、それに必要な勉強方法を習得することが重要となる。

現在の子どもたちはこの現代社会を生き抜くための「生きる力」に、自己への問いが浅く、社会的な感性が育たず、知性を生きることにつなげられないという弱点がある。この弱点が引き起こす引きこもりや被害妄想、自信過剰から起こる問題は社会現象化している。本来なら成長過程で、自分の存在の価値を他者との交流の中で発達させていく力が育成されていなければならないはずである。子どもたちがより良い人間形成を果たすためには、領域1「思考や認知を行動に表す能力・学力・技能」、領域2「自己認識・アイデンティティを深める能力・学力・技能」、領域3「態度・意見表明・価値観を形成する能力・学力・技能」、領域4「社会生活への適応力を形成する能力・学力・技能」の4領域の能力・学力・技能をバランス良く身に付けることが必要とされる。この4つの領域が示す能力指標には学校図書館と深い関わりを持つ能力が含まれている。領域1では「課題設定力」「調査研究能力」「情報活用力」「メディアリテラシーの能力」、領域3では「積極的・主体的態度」「創造的態度」、領域4では「コミュニケ

ーションの能力」があげられる（『学校経営と学校図書館』2013）。学校図書館は学習情報センター、読書センター、教材センターの機能を十分発揮し、生徒の創造的探求力を育て、上記の能力指標を生徒に培うために、自立と社会に調和して暮らせる能力を学習過程で教授していく必要がある。人が主体的・自主的に考え問題を解決しようとするときには必ず情報を必要とする。そのためには、

「知的発見のために規制の知識体系と方法を完全に習得する機会を準備する。子どもが個性的な考えや経験を引き出すための条件を整える。仲間同士で自分たちの発見や考えを交換し合う機会を持つ。専門家との話し合いや相談を受ける。司書教諭も含まれる。」  
(Taylor. 1972)

といった、学習条件が必要であるし、十分な学習形態も必要となる。また、生徒が

「自ら課題を見つけ」るためには、多くのものを正確に読まなければならない。「自ら学ぶ」には学ぶ意欲の形成と並んで学び方についての方法の習得が必要である。「自ら考える」には、多くの正確な知識の修得とそれらを構造的に捉える能力や社会的・文化的な価値を見いだすことが条件である。「主体的に判断」するには、それを裏づける情報や、なにより意志の強さが求められよう。」(中島. 2013)

現今の生徒の学びには、教科内容学習とリテラシー学習、コミュニケーションを通じた学習の展開と、ネットワークを利用した遠隔地間の共同学習があげられるが、実際には、学校図書館では先の3つである教科内容学習、リテラシー学習、コミュニケーションを通じた学習の展開によって、情報活用能力の育成が成されている。

新学習指導要領は、生徒の主体的な学習や問題解決能力を養う学習志向となっている。この問題解決型学習とは、生徒自身が問題や課題を解決するために主体的に方策を立て課題を探求する。そのためには、生徒が自発的に情報収集を行い必要な情報を選択することになる。いわゆる情報活用能力である。情報活用能力とは、情報活用の実践力、情報の科学的な理解、情報化社会に参画する態度の総合的能力といえる。

この情報活用能力を育成するためには、そのプロセスとして、

「①テーマの設定 ②情報探索の計画 ③情報・資料の探索と収集 ④情報・資料の活用  
⑤情報・資料のまとめと伝達 ⑥学習活動の評価の6段階」(斎藤. 2013)

を何度も繰り返し経験することが重要である。生徒が「自ら課題を見つけ」るためには、多くの資料を正確に読まなくてはならないし、「自ら学ぶ」には、意欲とその方法を習得しておかなければならない。また「主体的に判断」するには、情報の比較・考察する能力を必要とする。生徒が自律的・自発的な学習者になるために、問題の具体化から調査テーマを設定し、その問題解決に必要な情報を集め調査計画を明確にし、情報源の選択から情報を特定し、入手

し、組織化し成果へつなげる必要がある。生徒は、この6つのプロセスをたどりながらこれまでの自分の知識と統合させていかなければならない。読書による人間形成、学習による人間形成、どちらも学校図書館は人間形成という教育の理念に深くかかわっている。

平成20年3月に文部科学省は新しい学習指導要領を告示し、学習指導要領改訂のポイント(文部科学省, 2008)と教育内容に関して7つの改善事項をあげた。そのスタートを中学校は平成24年4月、高等学校は平成25年の入学生とした。高等学校においては、数学・理科に関してのみ平成24年4月にスタートしている。また、文部科学省は平成26年1月28日付で「中学校学習指導要領解説」「高等学校学習指導要領解説」の一部「中学校社会高等学校地理歴史・公民(2)自然災害における関係機関の役割等に関する教育の充実について」の改訂を行っている。学校図書館は教育機関として、これまで以上に生徒が多様な学習を行える場を提供しなければならない。

近年、学校教育にT.T.の関心が高まった経緯に、平成5年度から10年度にわたる文部省の「第6事公立義務教育諸学校教職員配置改善計画」が導入されことにある。個別指導やグループ指導等児童生徒一人一人の「個に応じた多様な教育」の指導方法の推進の要点を上げると、学級内習熟度別学習、学習集団習熟度別学習、興味・関心に応じた課題選択等の学習、学習集団での興味・関心に応じた課題選択等の学習、体験的学習における弾力的な学習集団の指導である。(教職員配置改善計画研究会, 1993)

T.T.は主に「協力教授」「協力的な指導」「TT方式」と称されている。略して「学び方の指導」、「利用指導」ともいわれる。読書指導、情報・メディアを活用した学び方の指導、調べ学習の際の資料活用学習に重要とされる指導法で、学習のプロセスに重要と捉えられている。このT.T.は、1955年に米国で始まり、1970年前後日本に紹介された指導法である。その後T.T.は、「複数の教師が協力して教育指導にあたる方式」「複数の教員が役割を分担し、協力しながら指導計画を立て、指導する方式」と定義され、指導方法の一つにあげられた指導法である。だが、学習者の意識を集中することが難しいという問題点もあり、文部科学省は2006年の資料に「約8割の学校がクラス人数を引き下げたほうが、T.T.よりも効果的である」と記している。T.T.の展開には、司書教諭が授業支援の役割を担っており、T.T.を学習指導案の作成から関わることで授業時間内・外においても生徒のメディア活用能力の育成と、人間形成につながる読書指導を期待できる。司書教諭の具体的な役割は、生徒の主体的な学習を支援し、T.T.により授業支援を行い、情報収集や情報提供を各教員に行うことにある。

## 2. T.T.の定義

ティーム・ティーチング(T.T.)は、

「複数の教師が協力して教育指導にあたる方式。協力教授組織ともいわれる。児童生徒の能力などに応じて教育指導を個別化し、チームの長に特別手当を出すことによって教員

の待遇改善を図るなどの目的のため米国で提唱され発達した。日本では1970年前後にその理論や実践が紹介され、多くの小・中学校に導入、実践された。近年では、個に応じた教育指導の観点から、国の政策として推進されている。」(新井, 2014)

と記述があるが、研究者によってT.T.の定義が異なる。教育現場で行われる協働形態としては、laboratory (研究室・実験室・制作室) 体験学習の実践に必要とされてきた経緯がある。このT.T.が体験学習に及ぼす影響は大きい。

高浦勝義が「教師がチームを組んで協力して子どもの指導にあたる指導方式」(高浦, 1999)と定義していることから教師側の体制と指導方式と捉えることができる。また、加藤幸次は、

「教師と共に子どもたちも一つのチームをつくつて、協力し合って指導し、学ぶ新しい指導・学習組織」(加藤, 1994)

と定義したが、その翌年「T.T.を一元的ではなく、多様性をもつ柔軟なもの」(加藤, 1995)として捉え「現実的・生産的」であるとした。多方面から受け入れた情報や知識をプロセスの段階で統一し学習へ取組むことができるという特性を有しているからだ。

ここでは研究者の定義の比較はしないが、それぞれの定義の中で発達段階を踏まえた指導法が一様に展開され、その成果が生徒の情報活用能力の育成につながるものとする。

T.T.の歴史は、1955年、ハーバード大学のケッセルによって考案された教授法と言われており、「協力教授組織」として浸透する。当時、「教室における教師の権力性や権威性が一点に集中することによる学習者の主体的学習を阻害している状況を改善するために開発された教授方法」であり、T.T.の導入で「一人の教師に集中していた権力性や権威性が分散する」と考えられた。その後、1957年、マサチューセッツ州レキシントン、フランクリン小学校のレキシントン・チーム・ティーチング・プログラム (LTTP) として発展したプログラムである。当初の目的は、「職階制の導入によって優秀な教員の転出を防ごうとした」、「教員不足の解消、協力体制をもとにした授業の改造」の解決策として実行された。アメリカで実施6年後の1963年、日本に導入され実践が始まった。J. T.シャブリソは、T.T.の多様を整理するための定義を

「授業組織の様式で、教職員と彼らに割り当てられた生徒を含み、二人もしくはそれ以上の教師が、協力して、同じ生徒グループの授業全体、またはその主要部面について責任をもつものである」(シャブリソ, 1966)

とした。日本でのT.T.は、「学級担任制を前提とした教授組織で生じる問題点を補う補助的な方法の一つ」(高浦, 岩崎, 1999)と捉えていた。

中学・高等学校で学校図書館を利用したT.T.の展開は、事実上教科教諭と司書教諭の二人体制が一般的である。実質的に捉えれば、教科教諭と司書教諭の特性を最大限に生かした体制

と言える。そのメリットは、互いの専門性や特性を生かした質の高い指導ができることだ。教科教諭の創造的授業と生徒の個に応じた指導を可能とし、理解不足児や理解遅滞児への指導が可能となる。生徒個人の能力や適性に応じた学習指導の対応が出来る理想の授業展開である。

2006年に文部科学省が発表した資料では、「約8割の学校がクラス人数を引き下げたほうが、T.T.よりも効果的」との記述が見られるが、これは教科を対象に複数の教員がT.T.指導を行うことを前提にしたもので、少人数学級の教育効果は世界でも日本でも認められており、アメリカの研究調査結果である「グラス・スミス曲線」において、学級小規模化に従って、学習の到達度、情緒の安定、教員の満足度が高くなっていることが証明されている。T.T.を「複数の教員が役割を分担し、協力し合いながら指導計画を立て、指導する方式」（「議会だより」2013）と定義を理解することができる。

T.T.は考え方や内容や方法に多様性があり、指導によって統合的に生徒の知識の蓄積そのものに近づく可能性を持つものである。複数の教員の協力が生徒の学びの場を創り上げることで、生徒の学習への取り組みの変化や成長が期待できる。生徒の個性や個人差に対応した指導ができることで、生徒の学習への意欲や取り組みを喚起できることは、学習指導の展開にも期待できる。今までのような教師一人の学習展開ではなく個に応じた指導により、生徒個人が持つ興味関心、学習スタイルや適性、生活経験を踏まえた指導により、生徒個々の学習意欲を高め主体的に学ぶ力や問題解決能力の育成への期待につながる。生徒自身も学習への個の可能性やつまづきを克服できるようになる機会を持つことで、学習に対しての次のステップへ自ら進めるようになる。また、学力の側面と考えられる学び方や学習に対しての意欲といった測りにくい部分の評価を複数の教員が行うことは、生徒自身自らを多面的に捉えることが出来るようになり、自分の可能性を広げることへつながる。生徒にとって学習面にある側面的なものに対しての環境と、学習時に起こる人間関係などを考慮した学習環境を整えることは、生徒の主体的学習態度を養う機会になるはずである。生徒への学習指導の展開に携わる教員は、互いの専門性や指導方法を理解しあい、より良い授業展開をおこなうことになる。

文部省発行の事例集「総合的な学習の時間」（文部省1999-2000）によれば、総合的な学習の時間にT.T.を採用した学校数は、小学校54校（60校中）、中学校23校（23校中）、高等学校7校（7校中）であり、全体の93%が実施したことになる。

「全国校長調査と教員調査」（山崎・水野・藤井・高旗・田中 2004-2005）によると、35,322校（『全国学校総覧』2004）の内3,804校を抽出しT.T.と少人数学習の調査を発表している。中学を例にとると、T.T.実施の中学校の実施率は、「現在、実施している」45.9%（国立）、70.8%（公）、33.3%（私）と私立中学校のT.T.の実施率は低い。また、中学の教科別比率を例にとると、国立15.1%（国）・2.2%（社）・28.8%（数）・9.4%（理）・12.9%（英）・5.8%（体）・20.9%（総）・5.1%（他）、公立8.2%（国）・1.5%（社）・51.1%（数）・6.0%（理）・5.0%（英）・6.4%（体）・6.6%（総）・3.3%（他）、私立7.9%（国）・0.0%（社）・9.0%（数）・1.1%（理）・24.7%（英）・12.3%（体）・5.6%（総）・11.3%（他）で、私立のT.T.実施率は低い。私立は全体の

実施率が低いことで教科実施率も低い。授業形態の多様化を考える教員が増えているといわれる現在、公立の中学校は学年を問わず59.7%～68.6%の率で均等に行われており、実施教科は数学、英語、理科、保健体育、美術、音楽の教科があげられていた。

### 3. T.T.は生徒の学習意欲を変えられるか

文部省の事例集などを見ると、私立はT.T.の導入は低い。本校では、学校図書館として生徒のメディア活用能力の育成や情報活用能力の育成を教科との連携で図れることを期待しつつT.T.の導入を行なっている。実施期間は、年度により異なる。2011年度の実施期間は、教科担当教員の単元の進度が3学期に集中していた。

授業計画の立案は次のように行った。①教材・単元の指導計画を検討する。②指導計画に基づいて、教材等を共同で準備作成する。③単元の終了後、指導の評価について協議し、改善点を確認する。この3点に重点を置き、教科教諭の授業展開に応じて生徒全体の動きを見ながら授業展開を行った。学習に対する動機付けや支援等を行うことで生徒の集中力の継続になり生徒の習熟度の確認ができ、的確なアドバイスは理解を深めさせる指導となると思われる。

[本校の事例]

教科	学年・クラス数	人数	実施期間	打合期間	事前準備	分野	備考	指導
国語	中3(3) 高3(6)	63人 189人	1/10 ↓ 2/21	11/1 ↓ 1/9	プリント	小説 詩 絵本 紙芝居	・音声による情報伝達 ・本の選定 ・本の構成 ・本の目的を知る	・個人の興味、理解度、進度に合わせた資料利用の直接指導 ・発表指導 ・学習室 ・館内の巡回指導
理科	中2(3)	69人	2/6 ↓ 3/5	12/3 ↓ 1/31	プリント	科学技術 人間	・タイトル・テーマ設定の理由 ・研究のねらい ・研究の内容と特色 ・他教科や校外活動との関連 ・本の選定 ・本の構成 ・本の目的を知る ・演習問題	・班、個人の興味、理解度、難易度、進度に合わせた資料利用の直接指導 ・※「5W1Hマップ」の使用方法 ・図書館資料の選び方、利用の仕方 ・PC操作 ・インターネット使用の指導
公民	中3(3)	63人	2/6 ↓ 3/5	12/4 ↓ 1/31	プリント	社会	・テーマ学習の準備 ・本の選定 ・本の構成 ・本の目的を知る ・本の作りを知る	・班の興味、理解度、難易度、進度に合わせた資料利用の直接指導 ・※「5W1Hマップ」の使用方法 ・図書館資料の選び方、利用の仕方 ・PC操作 ・インターネット使用の指導

※「5W1Hマップ」は、自分のテーマを中心に置き、そのテーマについて「いつ、どこ

(で)、だれ(が)、なに(を)、なぜ、どのように」の場所に調べた回答を自分で書きこんでいく。この6つの項目に沿って答えを見つけることで、テーマが明確になる。

国語の単元は、「読み聞かせ・朗読してみよう」。音読・朗読の方法を通して、積極的にコミュニケーションを図る。教科教諭との打ち合わせで、中学3年生と高校3年生に同単元を試みたのは、発達段階によって内容の理解度や表現力、本の選定力、朗読力(読み聞かせ力)などを明確にすることとした。

理科の単元は、「調べ学習(研究授業)」として各生徒に「テーマ学習」を行わせ、資料の収集、資料の選択から発表に至るプロセスから学習能力を養うことであった。テーマ(教科書p91)は、「科学技術と人間」いろいろなエネルギー、いろいろな電池、新素材、エネルギー資源の利用、情報通信技術、環境問題の化学とし、原則、大テーマを一つ選ぶことを必須とする。

公民の単元は、「調べ学習」として各班に「テーマ学習」を行わせ、資料の収集、資料の選択から発表に至るプロセスから学習能力を養うことであった。テーマ「地球社会とわたしたち」国際問題と地域市民、地球市民をめざして、21世紀の資源、エネルギー問題、地球環境を考える、市民が支える環境運動、人口・食糧問題、世界の子どもの問題、国際社会と世界平和、主権国家と国際社会、地域主義の動き、国際連合のしくみとはたらき、新しい戦争—テロリズム、地域戦争、世界平和のためにであった。

評価は、生徒の学習活動すべてを対象としている。発表する時の内容(全般・工夫度・見やすさ・わかりやすさ・添付資料など)、発表する時の内容の理解度(考察・感想を含め)個人や班員全員に質問、研究授業への関心・意欲・態度・個人や班員の授業態度等観察、レポート、発表までを含む。調べ学習は情報活用能力の育成プロセスとしての「①テーマの設定 ②情報探索の計画 ③情報・資料の探索と収集 ④情報・資料の活用 ⑤情報・資料のまとめと伝達 ⑥学習活動の評価の6段階」(斎藤.2013)を経ていると考えられる。

T.T.を実施した後、次の項目でアンケート調査(2012.2～3月)を行った。

生徒への質問は、1.この授業は好きか 2.この授業に進んで参加しているか 3.T.T.は初めてか 4.授業の内容はいつもより分かりやすい 5.質問がしやすい 6.資料の見つけ方が分かる 7.難しい内容でも資料が探せる 8.複数の資料を探せるようになった。の8項目とした。回答は、はい・どちらともいえない・いいえとした。生徒数は、中学2年生69人、中学3年生63人、高校3年生187人である。

教科教員への質問は、1.T.T.はどうだったか 2.生徒を多面的に捉えられ、長所が伸ばせる 3.指導方法が広がる 4.生徒への対応に余裕ができる 5.教材の準備ができる。の5項目とした。教員数は、教科数で4人であった。回答は、良かった・どちらともいえない・いいえとした。

アンケート調査結果 (%)

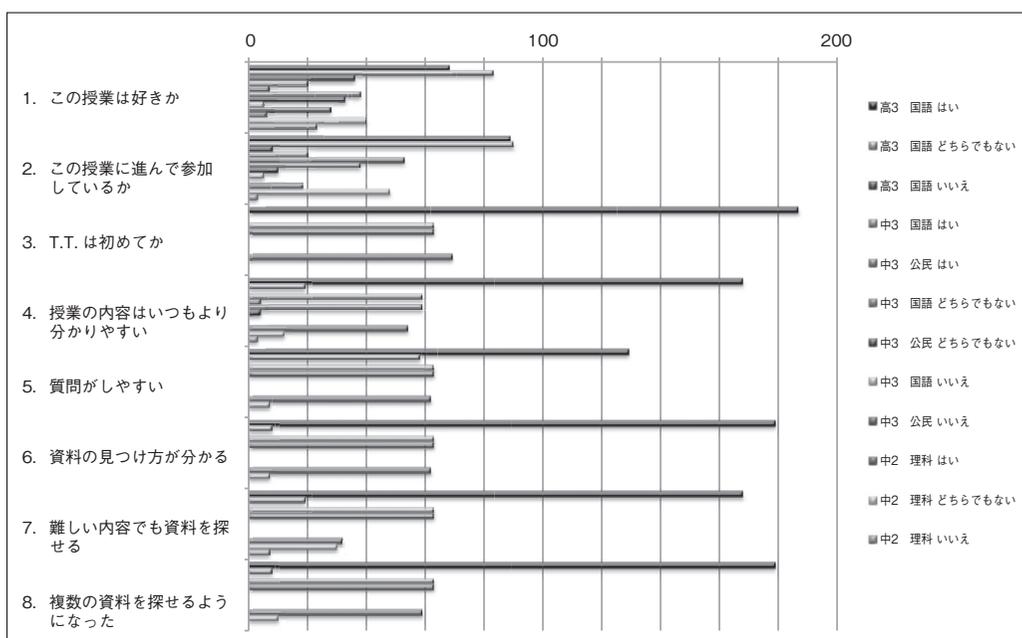
生徒の回答

T.Tアンケート 項目	高3 国語				中3							中2 理科			
	はい	どちらでもない	いいえ	計	国語はい	公民はい	国語どちらでもない	公民どちらでもない	国語いいえ	公民いいえ	計	はい	どちらでもない	いいえ	計
1. この授業は好きか	36%	44%	19%	187	32%	11%	60%	52%	8%	44%	63	9%	58%	33%	69
2. この授業に進んで参加しているか	48%	48%	4%	187	32%	84%	60%	16%	8%	0%	63	26%	70%	4%	69
3. T.T.は初めてか	100%	0%	0%	187	100%	100%	0%	0%	0%	0%	63	100%	0%	0%	69
4. 授業の内容はいつもより分かりやすい	90%	10%	0%	187	94%	6%	94%	6%	0%	0%	63	78%	17%	4%	69
5. 質問がしやすい	69%	31%	0%	187	100%	100%	0%	0%	0%	0%	63	90%	10%	0%	69
6. 資料の見つけ方が分かる	96%	4%	0%	187	100%	100%	0%	0%	0%	0%	63	90%	10%	0%	69
7. 難しい内容でも資料を探せる	90%	10%	0%	187	100%	100%	0%	0%	0%	0%	63	46%	43%	10%	69
8. 複数の資料を探せるようになった	96%	4%	0%	187	100%	100%	0%	0%	0%	0%	63	86%	14%	0%	69

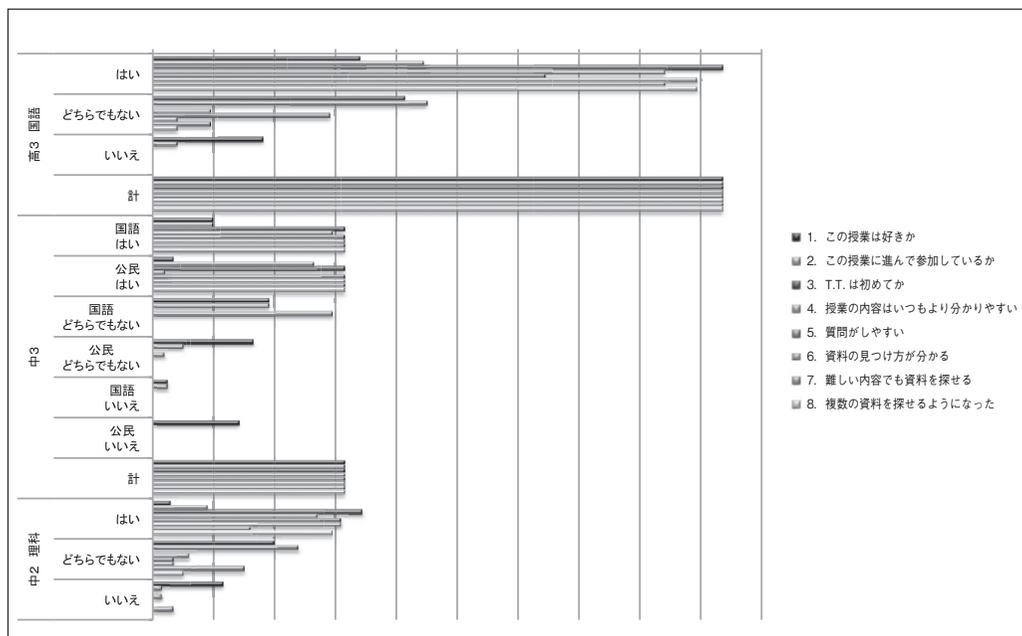
担当教員の回答

T.Tアンケート 項目	回答	教員			
		はい	どちらでもない	いいえ	計
1. T.T.はどうだったか		100%	0	0	4
2. 生徒を多面的に捉えられ、長所が伸ばせる		100%	0	0	4
3. 指導方法が広がる		100%	0	0	4
4. 生徒への反応に余裕ができる		100%	0	0	4
5. 教材の準備ができる		100%	0	0	4

質問項目別アンケート調査結果



## 学年別・教科別アンケート調査結果



教科の特質はあるが、中2理科では、「1.この授業が好きか」〈はい9%〉、「2.この授業に進んで参加しているか」〈はい26%〉に対し、T.T.の経験後には、「4.授業の内容はいつもより分かりやすかった」〈はい78%〉、「5.質問しやすい」〈はい90%〉、「6.資料の調べ方がわかる」〈はい90%〉、「8.複数の資料が探せるようになった」〈はい86%〉であった。生徒の意識が「この授業が好きか」〈はい9%〉、「この授業に進んで参加しているか」〈はい26%〉だったものが、「質問しやすい」環境となり「資料の調べ方がわかる」「複数の資料が探せるようになった」ことが、学習に対して前向きになったといえる。中2という年齢と理科という教科ということもあるのか、「難しい内容でも資料が探せる」〈はい46%〉ではあったが、「複数の資料が探せるようになった」〈はい86%〉ことは、学習意欲の向上と捉えられる。

中3国語では、「1.この授業が好きか」〈はい32%〉、「2.この授業に進んで参加しているか」〈はい32%〉と同率を示しているが意欲としては低い。T.T.の経験後には、「4.授業の内容はいつもより分かりやすかった」〈はい94%〉となり、「5.質問しやすい」「6.資料の調べ方がわかる」「7.難しい内容でも資料が探せる」「8.複数の資料が探せるようになった」は〈はい100%〉となった。生徒の意識が「この授業が好きか」〈はい32%〉、「この授業に進んで参加しているか」〈はい32%〉から、「質問しやすい」「資料の調べ方がわかる」「難しい内容でも資料が探せる」「複数の資料が探せるようになった」ことで学習に対して前向きになり、学習意欲の向上と捉えられる。

中3公民では、「1.この授業が好きか」〈はい11%〉に対し〈どちらともいえない52%〉〈いいえ44%〉と答えているが、「2.この授業に進んで参加しているか」〈はい84%〉と授業には

進んで参加している生徒が多い。T.T.の経験後の「4.授業の内容はいつもより分かりやすかった」〈はい6%〉に対し〈どちらともいえない6%〉と低い率を示した。しかし、「5.質問しやすい」「6.資料の見つけ方がわかる」「7.難しい内容でも資料が探せる」「8.複数の資料が探せるようになった」は〈はい100%〉となった。ここで推測できることは、生徒がテーマを設定し、その問題点を見つけ、たくさんの資料を見つけて分析し、解決して行くことの自己解決策のきっかけを支援し指導することが必要であることが認識できる。生徒をいかに学習に向き合わせるかによって、生徒は学習に対して前向きになり学習意欲の向上となると捉えられる。

高3国語では、「1.この授業が好きか」は36%、「2.この授業に進んで参加しているか」48%であったが、T.T.の経験後には、「4.授業の内容はいつもより分かりやすかった」90%、「5.質問しやすい」69%、「6.資料の見つけ方がわかる」96%、「7.難しい内容でも資料が探せる」90%、「8.複数の資料が探せるようになった」96%であった。生徒の意識が「この授業が好きか」は36%、「この授業に進んで参加しているか」48%であったことから、「資料の見つけ方がわかる」ようになったことや、「難しい内容でも資料が探せる」ようになったこと「複数の資料が探せるようになった」ことの自分への意識改革が学習に対して前向きになり、学習意欲の向上となったと捉えられる。

T.T.の経験により生徒は教科を問わず、問題解決に向けての想像力、創造力、表現力のステップアップができたと思われる。心と動作の関係の中で学習体験をすることで、生徒の成長が見られる。高3の生徒の多くは、T.T.経験後、姿勢や行動に変化が生じ大学生活に積極的に望もうとする姿勢に現れた。卒業までに、社会的に評価された小説等をより多く読むという傾向が顕著に現れたのも現状である。中2の調べ学習は総合的な見識を育てる学習内容の構成が、科学の基本的な概念の定着を図る学習効果につながる。T.T.により、生徒の調べ方の未熟さを解決でき生徒一人ひとりの進度の差を埋めることができた。

中3の調べ学習で習得した概念は、社会の理解と形成に必要な資質や能力の育成となる。公民のテーマ学習は社会問題が多く、図書資料だけでは現在の社会問題の解明には至らない。定着した説と、現時点での社会の動きを捉える部分とがあり、図書館の資料のみで発表資料を作成するには、社会の動きが違ってくる。社会という幅広い知識の要求は、自校の学校図書館資料のみでは対応が難しいのも現状だ。新情報をどこから得るかという問題があり、必然的にインターネットに頼ることになる。正しい情報の選択や、どの情報をどのように使用するかという、能力の育成につながってくる。選択した情報をそのままコピーペーストしていないか、最初に出てきた情報だけで判断していないか、情報だけに頼らず情報をもとに自分の考えが見い出せたか、と言った情報活用能力を必要とされる教科とって良い。コンピュータの利用の仕方、特に中学生の学習指導においてはインターネット情報活用の力が必要であり、授業を通して、学校図書館に設置されたパソコンを駆使した情報収集・情報選択の能力が育成され、洗練された情報活用能力の育成につながる。T.T.は、生徒の情報収集・情報選択能力の育成を支え

ているといえる。また、資料的的確な活用は、生徒の総合的な見識を育てるのに相応しいものといえる。

### Ⅲ. おわりに

今回のT.T.に関する考察は、あくまでも学校図書館の資料を利用した学習指導に焦点を当てたものである。また、学校図書館は図書館の資料を十分に生徒に活用させた学習の展開によって、情報メディア活用能力の育成を行うという役割を果たさなければならない。司書教諭取得教科の一つにあげられる『学習指導と学校図書館』では、情報メディア活用能力を小・中・高で育成することを目指している。教科担当教諭が学校図書館を学習計画に組み入れた授業の展開を年間計画に組み入れた時点で、学校図書館の資料の活用が決まる。学校図書館は、年間計画に教科が組み入れるのをただ待つわけではない。学校図書館側からの資料の活用の発信を行うことも重要であるからだ。

T.T.導入は公立中学校が多く、授業内に複数の教員を配置した授業展開の指導態勢で行うと、よりはっきりとしたメリット、デメリットが浮かび上がっている。例えば、「一斉授業の中で、より行き届いた指導の実現」小76.8%・中72.6%、「個人差に応じた指導の実現」小83.8%・中77.3%（国立教育政策研究所. 1998）の実施率がメリットとしてあげられている。この他にも、教師間で指導力が高められることや生徒への理解が深まるなどがある。また、「事前打ち合わせの不十分」「指導力の低下」「共通理解の困難」「指導の不統一」といった人間関係・信頼関係に至ることも起きている。改善点では「TTに向けた教材研究・準備、打ち合わせのための時間確保」「学年ごと、教科ごとに配置するなど、TT定数をもっと増やすこと」（国立教育政策研究所. 1998）があげられているが、幸いに上記に並ぶ項目は自校にはない。

近年、生徒の能力や適性等の差が大きくなっているのが現状といえる。それに伴い授業形態の多様化も考えて行かなければならない。早ければ2016年度から導入される「知識を活用し自ら課題を解決できる能力」を見る大学入試、センター試験も選抜方法も変わる。大学入試改革と称し「能力・意欲・適正を多面的、総合的に評価する大学入学者選抜制度」を政府の教育再生実行会議で議論し提言している。中教審の答申案は「知識の活用力や思考力、主体性を評価する入試に転換するべき」と指摘し、個別試験は「志望理由や面接、プレゼンテーション能力、集団討論、部活動の実績、資格試験の成績などを組み合わせて選抜する。学力は「記述式、論述式」にする。センター試験は、「思考力・判断力・表現力」を評価する「大学入学希望者学力評価テスト」に変える。」とする。大学入試が「覚える」から「考える」に変わる。知識や技能の習得の重視により、「一般入試」「推薦入試」「AO入試」の区分がなくなる。」（朝日新聞. 2014）という。今後、従来の教育方法が変わらなければ、2016年度入試に臨めない状況だ。文部科学省は「教育の情報化ビジョン」（2011.4）の中で「学びのイノベーション（技術革新）」を打ち出している。これは個別学習や協働学習の推進により、学習活動によって習得する「習得・活用・探求」のバランス重視といえる。

社会が変わる中で、情報を活用することは問題の気づきと探求するテーマの設定から始まる。情報活用能力のレベルにより、既存の知識や関心に情報入手の格差が生じ問題解決には至らない。生徒が情報活用スキルを身に付けていなければ、問題の背景にある知識を入手することは難しい。それ以上に、自分の行動や考え方、性格など別な立場から認識すると言った心理学的用語のメタ認知的方法を取るのはいくらも難しくなる。課題達成には探した情報をもとに考えるとことが要求される。情報活用能力とは「体系的な情報教育の実施に向けて」（文部科学省、1997）で示される情報教育目標の「情報活用の実践力」「情報の科学的な理解」「情報社会に参画する態度」の能力をいう。生徒の情報活用の起点となる問題の気づきが、自律的、自発的な学習となる。そのプロセスである問題の気づき・具体的な調査・テーマの設定・問題解決のための情報選択を明確化していく態度が重要となる。生徒が主体的に情報を収集・判断・表現・処理・創造し、発信・伝達・評価・改善ができる能力を身に着けることが情報社会の創造へとつながる。社会が情報活用能力や情報選択能力の必要性を唱える意義が見えてくる。

学校図書館が教科との連携を持ちT.T.を行うことはアンケート調査において多少のメリットの確証は得られたと思う。T.T.は生徒の学習意欲の導きに可能性を持つものとして今後も取り組みたい指導法である。T.T.の利点は学習計画の段階から携われることにある。教師個人の知識と経験だけでは学習の固定化がされやすい。勿論、教師によって発問や展開をはじめ、生徒の具体的な対話は異なるが、T.T.によって相対化も進む。教科教諭一人に対して生徒の数が減少するため、学習内容を異なる視点から説明することもできるし、解説もできる。生徒の理解が多角化し深くなることを考えると、それらは生徒の利点にもつながるはずである。T.T.活用の指導は、教科教諭のみの指導と比較して、個の見取りがきめ細かくでき、指導も深まることや、生徒のフォローがその場で出来ることなど、自校においても良い成果や結果を導き出したといえる。現在私立中学・高校は授業の難易度や受験への対策等で授業T.T.の導入が増えている（2014. 最終アクセス）。今後、高校生については大学受験を視野に入れた学習能力を確実に身につけることが重要となる。生徒が自ら学習課題を見つけ出し正面から追究していく力をはじめ、生徒の個性の開発や思考力、判断力、表現力、創造力を備えた学力の育成をいかにして育成していくかを課題として捉えたい。

## 【出典】

### 参考文献・参考図書

- ・北本正章『学校経営と学校図書館』「第1章 教育と学校図書館 新しい学力観」古賀節子編集 樹村房2013 p.12（現在、青山学院大学教育人間科学部教授）
- ・Kenneth I. Taylor「Creative Inquiry and Instructional Media. School Library Media Quarterly. Vol.2 1972 p.18-62
- ・中島正明『学校経営と学校図書館』「第4章 教育課程と学校図書館」古賀節子編集 樹村房2013 p.60

(現在、安田女子大学文学部児童教育学科教授)

- ・文部科学省「学習指導要領改訂のポイントと教育内容に関する主な改善事項」文部科学省 2008.3
- ・文部科学省「中学校学習指導要領解説・高等学校学習指導要領解説の一部改訂」文部科学省 2014.1.28
- ・斎藤陽子『学習指導と学校図書館』「第5章 情報活用能力を育む指導 情報活用プロセスモデル」古賀節子編集樹村房 2013 p.38 (現在、清泉女子大学准教授)
- ・教職員配置改善計画研究会編「教師のためのチーム・ティーチング実践事例集」ぎょうせい 1993
- ・朝日新聞社編「知恵蔵2014」朝日新聞社 2014 (新井郁夫 現在、上越教育大学名誉教授)
- ・高浦勝義『T.T.の基本原理解』チーム・ティーチング事典 新井郁夫・天笠成編 教育出版社 1999 P2-p101 (現在、明星大学教育学部教育学科教授)
- ・加藤幸次『チーム・ティーチングを生かす先生』図書文化社 1994 (現在、上智大学名誉教授)
- ・加藤幸次 監修『チーム・ティーチングの計画・実践・評価Q&A 個性化教育推進のために』九州個性化教育研究会編著 黎明書房 1995
- ・岩崎三郎『日本におけるT.T.の変遷と課題』学習の総合化をめざすチーム・ティーチング事典 新井郁夫・天笠茂編 教育出版 1999 pp.66-82.
- ・『チームティーチングの研究』J.T.シャプリソ/H.F.オールズ共編 黎明書房 1966. p27
- ・「平成25年度重点事業」議会議決より 2013
- ・文部省『特色ある教育活動の展開のための実践事例集―「総合的な学習の時間」の学習活動の展開―(小学校編)』教育出版 1999
- ・文部省『特色ある教育活動の展開のための実践事例集―「総合的な学習の時間」の学習活動の展開―(中学校・高等学校編)』教育出版 2000
- ・山崎博敏等「全国の小中学校における少人数教育とチーム・ティーチングの実施状況：2004年全国校長と教員調査報告」山崎博敏・水野考・藤井宣彰・高旗浩志・田中晴彦 2004.-2005. P74-76
- ・教育開発研究所『チーム・ティーチングの組織、運営と強化の特性』教職研修総合特集NO.101 チーム・ティーチング読本 教育開発研究所 1993 pp.30-36.
- ・中尾陽子『チーム・ティーチングラボラトリー体験学習における意味を探る』「人間関係研究」第10号 p114. 南山大学人間関係センター 2011
- ・国立教育政策研究所「広報112号」国立教育政策研究所 刊行物 1998 (2014.12.1.最終アクセス) [https://www.nier.go.jp/kankou\\_kouhou/112takaura.htm](https://www.nier.go.jp/kankou_kouhou/112takaura.htm)
- ・朝日新聞社「大学入試知識の活用重視」朝日新聞社 2014.10.25. 掲載
- ・文部科学省「体系的な情報教育の実施に向けて」(1997.10.3)「情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議第1次報告」1997 (2014.9.28 最終アクセス)